

のかを、改めて問い直すものといえます。

一方、モデルの公表を受け、実践者の間では、

- ・安心は授業の中でどのように形成されるのか
- ・理解と表現はどのような関係にあるのか
- ・習得した内容は、どのように活用へとつながるのか
- ・各階層は一方向に積み上がるものなのか、それとも相互に往還するものなのか

など、様々な問いが生まれているのも確かでしょう。

本シンポジウムでは、授業 UD モデル Ver.2.0 を意識しながら実践を積み重ねてきた教員と、大学院において授業UDに関する研究に取り組む大学院生が、それぞれの立場から話題提供を行います。話題提供では、**UDモデルの階層や階層間のつながりに着目**し、実際の子どもの姿や授業実践、研究知見をもとに検討していきます。

さらに、指定討論者を交え、**各階層の意味、階層相互の関係、モデルには直接表されていない子どもの内面や関係性の変化について議論**します。これらを通して、授業UDモデル Ver.2.0 を固定的な階層図としてではなく、多様な子どもの学びを捉え、授業を改善していくための動的なモデルとして深掘りすることを目的とします。

≪ 話題提供 ≫

「安心」を作り出す学級づくり — 就学前教育からの接続について（架け橋プログラム） —

三重県桑名市立長島中部小学校 近藤 佑生

『小1 プロブレム』という言葉があります。具体的には、幼稚園や保育園から小学校にあがった際、子どもたちが小学校での授業や生活に馴染めず、問題行動を継続的に起こしてしまうことを指します。この小1 プロブレムの原因の一つとして、学級での『安心』が保障できていないことが考えられます。

就学前の教育として、幼稚園教育要領等にも示された「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」において、「言葉による伝え合い」「標識や文字への関心・感覚」「思考力の芽生え」などは、小学校での学習への直接的な土台となっています。中でも、国語科での文字や言葉の獲得は、他教科での学習を進めていく根幹にあたります。

子どもたちの就学前の環境はさまざまであり、その状況を「揃えること」「学習を進めていくこと」は、学習環境を構成する上でどちらも重要であると考えています。就学前の幼稚園などでの学びを基盤とし（アプローチカリキュラム）、小学校入学初期の「スタートカリキュラム」において、児童が安心感（C：自信）と期待感（A：注

意、R：関連性）を持って文字や言葉の獲得に向き合えるように、授業を始めとする学校での場面において、さまざまな言葉を獲得し、小学校6年間の学習へと繋げていくために、1年生の文字指導や説明文教材の学習におけるA R C Sモデルを活用した学級づくり・授業づくりについて提案します。

≪話題提供≫

「安心」はどのように築き上げられるのか ～支持的風土を高めるクラス会議を中心とした人間関係づくりについて～

神奈川県川崎市立橘小学校 山下 敦

授業UDモデル Ver.2.0 では、「参加」「理解・表現」「習得」「活用」を支える土台のとして「安心」が位置付けられています。その「安心」は、どのようにして築き上げられていくのでしょうか。

教室を見回すと、一見楽しく関わっていそうで、心の中では不安や心配を抱え、本当の意味では繋がれていない。そんな子どもたちが増えていると感じています。そして、職員室を見回すと、一見楽しく関わっていそうで、心の中の葛藤や悩みをなかなか打ち明けることができず、毎年のように休職されたり、退職という選択を選んだりする先生方が増えていると感じています。

子どもたちと大人たち。どちらも多様性を包摂し「支持的風土」を高めることで「安心」が築き上げられ、前向きに挑戦していく学校を作り上げられると考えました。クラス会議を中心とした現在進行形の取り組みについて提案します。

≪話題提供≫

「授業UDに基づくICTの在り方」

宮城教育大学大学院 後藤翼斗

現在、私は大学院で社会科授業におけるICT活用の在り方について研究しています。特に、授業UDの考え方に基づき、多様な児童が安心して学習に参加し、理解したことを自分なりの方法で表現できる授業の実現を目指しています。

社会科では、「社会科はあまり好きではない」「歴史を学ぶことにどのような意味があるのか」等といった苦手意識や疑問をもつ児童がいます。また、ICT機器の操作に不安を感じたり提示された方法だけでは自分の考えを十分に表現できなかったりする児童もいます。こうした異なる実態やニーズをもつ児童に対して、ICTをどのように位置づけることができるのかを検討しています。

話題提供では、9月に実施する社会科授業の実践を取り上げます。児童の実態を踏

まえてICTをどのように活用したのかを示すとともに、授業UDモデルVer. 2. 0の「安心」「参加」との関係から、児童の学習の様子を分析・考察します。さらに、実践の成果と課題について現場の教員の方々と協議しながら、多様な児童の学びを支えるICT活用の在り方について検討を深めたいと考えています。

≪ 話題提供 ≫

「安心」と「参加」の間で何が起きているのか
—関係性・自己開示・探索に着目した台上前転の実践—

岩手県滝沢市立滝沢第二小学校

三浦 大栄

授業UDモデルVer.2.0では、「安心」が授業における「学び」の土台に置かれ、その上に「参加」「理解・表現」「習得」「活用」が位置付けられています。しかし、実際の授業において、子どもの安心はどのように形成され、どのような過程を経て参加へとつながるのでしょうか。環境を調整し、肯定的な関わりを行うだけで、子どもが直ちに学習へ参加するとは限りません。そこには、教師や仲間との関係性、自分の不安や願い、必要な支援を表す自己開示、自分に合った方法や支援を試す探索などの過程が存在すると考えます。

私は、子どもとの関係性を基盤として、「安心感—自己開示—探索—参加—参画」へと、子どもの学びへの関わり方が変化していく姿を追ってきました。本話題提供では、体育科「跳び箱運動」における台上前転の実践事例を手掛かりに、授業UDモデルVer.2.0における「安心」と「参加」の間で何が起きているのかを検討します。

特に、教師が設定した活動に加わる段階を「参加」、子ども自身が必要な支援や学び方を選択・調整する段階を「参画」と捉え、その移行過程に着目します。さらに、関係性や安心を授業開始時の前提条件としてのみ捉えるのではなく、子どもの自己開示や探索、それを教師や仲間が受け止める経験を通して、授業の中で形成され、更新され続けるものとして捉える可能性を提案します。